

都市政策・地域経済ワークショップ I（第5回）講演要旨

- 【テーマ】 VUCA時代の研究テーマ/進め方を考える
【講師】 大阪成蹊大学経営学部 教授 大島博文氏
【日時】 2023年5月12日(金) 18:30~21:20
【場所】 大阪公立大学 梅田サテライト 101 教室

・本日の研究テーマについて

今までの典型的な人生の過ごし方が終わりつつあり、世界、日本の状況、個人の状況が変わってきている時代の中での研究テーマについて、受講生との意見交換を通じて各自の研究テーマのヒントとなればと考えている。

1-1. 自己紹介より

社会人としてのご経験に紐づいた地域経済、労働経済をテーマに大学院では研究を行った。現職の大学教員としても、社会人経験は生かされている。

1-2. 取り上げるテーマ例（定番） ※資料1参照

- ・学術的・芸術的テーマ / 社会的テーマ / 最新のテーマ
- ・まちづくり一つとっても幅広い（資料1研究テーマ例#12）
- ・例として、まちづくりに別のテーマを掛算しオリジナリティのある研究テーマとなる。
 - まちづくりと学術的・芸術的テーマと掛け合わせる。
 - 例）まちづくり×文学（松山市など）、まちづくり×歴史（黒壁、五條、姫路）
 - 社会的テーマとの掛け合わせ
 - 例）まちづくり×防災、まちづくり×人口減少、まちづくり×少子高齢化
 - 超高齢化社会が進行し社会の変化を見据えての長期的なテーマを組み合わせた研究は、将来の社会の役に立つ可能性がある。
 - 最新のテーマとの組み合わせ
 - ・SDGS（17のゴールと169のターゲット）は世界共通の目標であり検討するとよい。
 - ・コロナ後の変化は、最新でオリジナリティ性が高い。表層的な見立ての真偽がわかる。
 - 例）東京圏人口減少と報道されるが、実際は圏域内で循環が起こっただけなど。
 - ・国際紛争も資源、貿易体制も影響を受けている。前後での変化に着目してみるとよい。
 - ・ChatGPT、メタバースなどもおもしろい。活用してみることも大事である。
 - ・スポーツ×まちづくりの論文も参考に。スポーツイベントで地域の刺激になる。

1-3 未来に向けたテーマ例

- ・内閣府などから発表されている未来予測に基づき検討する。

- ・人口減少・過疎地域や地方で問題が顕在化している。ガススタや医者のない町村がある。
- ・超高齢化社会・社会保障人口問題研究所のデータが参考に（E-stat、マクロ統計）
- ・都市化、人口集中・神戸市高層マンション規制条例等の検証なども考えられる。
- ・地球温暖化・食糧についての温暖化のとらえ方などの問題提起も大学院研究では可能だ。
（参考資料）内閣府「未来社会の姿と今後顕在化するであろう課題」（世界、日本）

1-4 地域を対象としたテーマ

- ・コロナ感染症についてのテーマ
- ・人口減少、東京一極集中、少子高齢化
- ・持続的な社会の構築・自然環境の保全、多文化共生社会の現実
参考）神戸市 2025 ビジョン・阪神間の課題 地域医療の充実 2, 3 次救急問題
- ・各自治体の総合計画を確認してみる

1-5. その他のテーマ例

- ・SDGs は、17 の開発目標では大きすぎるので 169 のターゲットで検討
例）×コロナ・使い捨てマスクの資源問題、ごみ問題
- ・矛盾するようなテーマを見つけたらオリジナリティが出せる。

1-6. VUCA 時代の到来

- ・VUCA・1990 年代の軍事用語・ベトナム戦争時ゲリラ戦法での米の大敗がきっかけ。
- ・変化が激しく、不確実で、複雑で、曖昧な戦争で勝つための戦略研究で生まれた定義。
- ・ビジネスでは 2016 年ダボス会議で再定義された。
Volatility：変動性，Uncertainty：不確実性，Complexity：複雑性，Ambiguity：曖昧性
- ・研究の進め方も PDCA ではない思考法の OOAD ループへ
Observe：観察→Orient：状況判断→Decide；意思決定→Act：実行
何が起きているか先入観なく観察し、状況判断。回転を速くし変化に対応しやすい。

2. VUCA 時代の研究の進め方のポイント

- ・自分の関わっている世界の変化であればアンテナを張っておける（課題発見）。
- ・データを集めたらすぐにまとめ、ゼミやワークショップで発表する等で他者と共有
- ・課題発見→情報収集→情報分析→表現・発信のサイクルを回す。

2-1 課題発見

- ・課題発見だけでは、課題解決につながらない。
- ・正解の流動化→自分の中でため込まず、多くの人を受け入れる「新たな解」の探究
- ・現状に満足しない、ゼロベース志向、評論家にならない意識が課題発見力を高める

- ・他者への傾聴、クリティカルシンキング、仮説思考が思考の上では大切

2-2 情報収集

- ・様々な方法があるが、重要なことは目的意識を持ち収集すること
- ・仮説検証のループを回すことが最も重要
- ・第1次データ（原点のデータ）であること。最も信頼性が高い
- ・データの探し方（まとめサイトの活用）総務省、E-Stat、統計センター、受賞論文

2-3 情報分析

- ・フレームワーク活用し分析・・・SWOT分析（強み、弱み、機会、脅威）は使いやすい
- ・統計ソフトを使って相関分析、因果関係を分析する
- ・VUCAの時代でも、データから今何が起きているか分析する
- ・情報分析のポイント どのような情報がどの程度収集されているか把握し、どのような方法で情報の整理・分析をするか決定
- ・分析結果の表現では図式化を取り入れる。地図による分析、整理はわかりやすい。地域を研究する上では、GIS（地理情報システム）の活用が考えられる。

2-4 表現・発信

- ・発信における伝えたいこと、要素の事前整理は大切。

最後に・・・VUCAの時代に大学院生としての大切な力とは
課題発見力、情報収集力、情報分析力、表現・発信力を以て、OODAループを回していく
ことが大切である。

<質疑応答>

- Q1) ダイバーシティ×まちづくりという掛算でテーマを検討しているが、未来に向けたテーマとしては、どのようなタイムスパンで考えるべきか。
- A) ダイバーシティも広いのでその中での絞り込みは必要である。その上で、男女共同参画白書や国土交通白書や国の計画での節目に着目してみるとよい。
- Q2) 社会人として仕事を生かしたテーマであるべきなのか。仕事以外でも住んでいる地域で感じた課題感で研究テーマをたてることは可能かどうか。
- A) 仕事以外でのテーマは、勉強だけで終わってしまうことがある。自分のデータが取りやすい点で仕事の領域に近いものが有利である。過去の論文を読み検討してほしい。
- Q3) 地域活性化における地方空港の役割を研究テーマとしたい。上位概念はどう考えるか。
- A) 地域活性化の先行研究より、基本的な理論の体系の中で地方空港と親和性が高いものを土台にするとよい。どれだけ上乗せできるかで独自性が出る。

- Q4) ウェルビーイングなまちづくりをテーマとした場合、どのような観点で評価されるか。
A) 学術的な問いが確立されているかどうかポイントになる。まちづくりだけでは問にならない。なぜ高齢者が一緒に幸福を感じられないのか？等の疑問形がつけられるといい。調べる価値がある問いかどうか重要。他者と議論すること。
- Q5) 「人口減少は食い止めるべきものなのか」という問いはテーマとしては適するか。
A) 価値観を待ちこむのは研究テーマになじまない。比較論というアプローチはある。カナダ、北欧は、日本と比較すると、人口密度が低くても幸福度が高いのはなぜか、という問いなどは学術的問いになる。疑問形を複数作り選定する方法もよいかもしれない。
- Q6) 先行研究の探し方、選考論文はどのように探すか。
A) まずは、書籍（図書館、ネット検索）、学術書を読み、その参考論文や先行研究をたどっていく方法をとっている。どの本を選定するかは非常に重要。
- Q7) 先行研究はどのように生かせばよいか。
A) 大学院生の研究であれば、単線ではなくて複線であるべき。例えば、複数の書籍を読んで、マトリックス表で相違点を整理し、どちらかが正しいかという仮説を設定しする。それまで根拠が示されていない部分について証明する。読み込みが大事である。
- Q8) 空家、ビルの再生の事例研究をしたい。居住者インタビューでの留意点はあるか。
A) インタビュー調査は社会調査の中で重要である。仮説設定が大切。インタビューで仮説を裏付けるものである。インタビューは定性的なものだが、定量的な項目を盛り込むのもひとつである。一方、信頼性のあるデータとして扱うには200~300サンプル以上が必要である。
- Q9) 官民連携と社会問題と掛け合わせて研究したい。テーマ決定のスケジュールは。
A) 一般的にまとまった勉強した上でテーマに集約していくが、社会人として仕事の繁忙期などを考慮し自分なりに集中して時間をとる必要がある。構想の発表会等を経てブラッシュアップし決まっていく。
- Q10) OODAについて、PDCAと比較してのデメリットはどのような点があるか。
A) PDCA全能の時代から、それだけでは難しいということでOODAという手法が目されてきた。OODAは、状況変化を速い回転で把握することに適している。一方、PDCAは、計画を立て理想像を達成するため、前提が変わらない場合に向いている。
- Q11) 肌感覚で仮説を構築してそれにあつたデータを収集する方法は間違っているか。
A) 闇雲にではなく、仮説構築ですすめることは大切である。重要なのは学術的な問いが立てられていることであり、答えを出すため必要なデータを集めるのは正しい。
- Q12) 産業連関表のプログラムを研究テーマとしたが、計算結果の担保はどうすべきか。
A) 何かの理論で計算しているのであれば、その理論に基づいたほかの計算結果との比較検証が可能である。元の理論が確立されていれば検証できたことになる。

(議事録作成者 鳥生由起江)